

〔研究ノート〕

## 新疆におけるイスラム教の定着：東チャガタイ汗国 —新疆イスラム教小史③—

丸山 鋼二

〔Research Notes〕

### Eastern Chaghatai-Khan Dynasty and the establishment of Islam in Xinjiang : A Short History of Islam in Xinjiang ③

Koji MARUYAMA

## 【目次】

はじめに

- 1 ハイドゥの乱
- 2 東チャガタイ汗国の成立
  - (1) チャガタイ・ウルスの再統一
  - (2) 東部ウルス：モグーリスターン・ハン国
  - (3) 西部ウルス：ティムール帝国
- 3 トゥグルク・ティムールと「ホージャ」の時代
  - (1) トゥグルク・ティムールによる強制集団改宗
  - (2) ス・フィズム（神秘主義）とホージャの登場
- 4 ヒジル・ホージャとその後のモグリスタン・ハン家
  - (1) ヒジル・ホージャの新疆東部仏教地区に対する「聖戦」
  - (2) モグリスタン・ハン国の東西分裂

おわりに——新疆におけるイスラム教の定着

## Abstract

In 1513, when the Buddhism power was expelled from Hami(the eastern end of Xinjiang), Islamization in the Eastern Turkistan was completed. However, there was a time of big stagnation before. After Kara-Khan Dynasty was driven away from the eastern Central Asia by a non-Islam regime Kara Khitai at the beginning of the 12th century, Islam lost its superiority in the central part of the Silk-Road(Central Asia) for two hundred years. Islam confronted with the biggest crisis because of the prosperity of Buddhism and Nestorianism under the rule of a non-Islam power, the Mongol Empire.

In 1420, the majority of the habitants in Turpan were Buddhists and a lot of Buddhist temples were built there. Mosques were face to face with Buddhist temples in Hami(Qmul).

In the Eastern Chaghatai-Khan Dynasty, Islam got rid of predicament and reached its superiority in Eastern Turkistan. The Eastern Chaghatai-Khan Dynasty not only expelled the Buddhist power from Xinjiang and established Islam in Eastern Turkistan, but also popularized Islam Suffism. At the same time, Khwajas made large invasion from Central Asia. Khwajas maintained the political and economical power that was strong enough to control the Eastern Chaghatai-Khan Dynasty, which is called "the Age of Khwajas".

#### [要 旨]

新疆東端のハミから仏教徒勢力が最終的に駆逐され東トルキスタンのイスラム化が完成したのは1513年のことであった。しかし、ここに至るまでには大きな停滞の時期もあった。12世紀前半にイスラム王朝カラハン朝が、カラキタイという非イスラム教徒のモンゴル人集団によって中央アジア東部から追い払われて以後の200世紀間、中央ユーラシア＝シルクロードにおけるイスラム教の支配は最大の困難に直面していた。モンゴル支配下の13世紀にはキリスト教、仏教、イスラム教の間での競合が頂点に達した。1420年の時点においても、トルファン<sup>1</sup>の住民の大多数は仏教徒であって見事な仏寺が営まれ、コムル（ハミ・哈密）にはモスクと仏教寺院が向かいあって存在していた。そのイスラム教の苦境を救い、さらに東トルキスタンでのイスラム教の優位をもたらしたのが東チャガタイ・ハン国（モグリスタン・ハン国、モグール・ウルス）の時期であった。

東チャガタイ・ハン国の時代は、たんに新疆から仏教勢力が駆逐され、イスラム教が新疆に定着しただけでなく、イスラム神秘主義思想（スーフィズム）が普及するとともに、ホージャ勢力が中央アジアから大量に侵入し、ハーンの権力を左右するほどにまで政治的経済的権力を保持する「ホージャの時代」を新疆にもたらした。

#### はじめに

中央ユーラシアのイスラム化は一般に迅速かつ徹底的であったといわれる。アラブによる軍事的占領と支配はイスラム化の起点ではあるが、イスラム化そのものではなかった。住民のイスラム教受容と地域での多数化（とくに農村部の住民を含めて）、イスラム的規範に則ったムスリム社会の形成には何世紀もの時間が必要であった。アラブの征服者が被征服民の改宗に必ずしも積極的でなかったことはよく知られている。が、オアシス都市での改宗は強制的に進められたといつてよい。

中央ユーラシアのなかで、マー・ワラー・アンナフル（アラビア語で「川の向こう側」の意、具体的にはアム・ダリヤ河以北のオアシス地域。旧称「トランスオクシアナ」）はイスラム化がテュルク化（トルコ化）に時間的に先行した地域であるが、パミールの東、とくに東トルキスタン西半<sup>①</sup>では、中央ユーラシア西方のアナトリアやアゼルバイジャンと同じくイスラム化とテュルク化の二つの現象がほぼ同時並行的に進展した、と指摘されている<sup>②</sup>。

① 東トルキスタン西半（新疆西部・南部）のテュルク化とイスラム化の同時並行現象については、拙稿「カラハン王朝と新疆へのイスラム教の流入 — 新疆イスラム教小史① —」『文教大学国際学部紀要』第18巻第2号（2008年1月）、51～66頁で検討した。

② 小松久男編『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』山川出版社、2000年、143～144頁。

東トルキスタン（新疆）のオアシス定住地帯のテュルク化はほかの地域に比してより迅速で、かつより徹底的であった。その東半のテュルク化は、840年のモンゴル高原におけるウイグル帝国の解体を契機に起こった遊牧民の移動の結果である。西半では、ここを支配したカラハン朝のもとで住民のテュルク化が急速に進展し、11世紀後半には住民はテュルク語を話していたと伝えられる。大規模な牧地が見込めないため、ここ東トルキスタンへ移住した遊牧テュルク族は早くからオアシスやその周辺に定住し、農耕を営むようになり、先住民と融合した。その結果、印欧語族とされる先住民たちは新たな支配者の言語（テュルク語）と宗教（当初は仏教）をともに受容した。

イスラム化とトルコ化が同時並行的に進展した東トルキスタン西半に対して、東トルキスタン全域をみれば、その後のイスラム化の進展はむしろ緩慢であった。諸宗教に対して一視同仁の立場をとったモンゴル帝国のもとで、とくに東トルキスタンの東部ではイスラム教は仏教と長期にわたって共存しており、1420年にティムール朝のシャー・ルフ（第3代君主、在位1409～47）から明の永楽帝に遣わされた使節団は、トルファンに住民の大多数が仏教徒であって見事な仏寺が営まれていたこと、コムル（ハミ・哈密）にはモスクと仏教寺院が向かいあって存在していたことを伝えている。新疆東端のハミから仏教徒勢力が最終的に駆逐されたのは1513年のことであり、東トルキスタンのイスラム化はようやくここに完成したのであった<sup>③</sup>。

しかし、ここに至るまでには大きな停滞の時期もあった。12世紀前半にイスラム王朝カラハン朝が、カラキタイという非イスラム教徒のモンゴル人集団によって中央アジア東部から追い払われて以後の200世紀間、中央ユーラシア＝シルクロードにおけるイスラム教の支配は最大の困難に直面していたからである<sup>④</sup>。イスラム教はカラキタイ及びモンゴル帝国下で他の宗教のために、シルクロード中央部におけるその卓越した地位を喪失した。明らかに中央アジアにおけるキリスト教、マニ教、仏教はイスラム教に対してそれぞれ防衛的な状況に陥っていたが、カラキタイ及びモンゴル人による活動はこの傾向を逆転させた。少なくとも一時的にはイスラム教を防御側に追いやった。その象徴的な事例が、カラキタイという非ムスリム国家による中央アジアでのイスラム教の中心であったサマルカンドとブハラへの征服である。中央アジアにおける、このイスラム教の後退は2世紀に及び、モンゴル支配下の13世紀にはキリスト教、仏教、イスラム教の間での競合が頂点に達した。そのイスラム教の苦境を救い、さらに東トルキスタンでのイスラム教の優位をもたらしたのがモンゴル帝国の継承国家の一つである東チャガタイ・ハン国であった。

そこで、本稿<sup>③</sup>では、まず13世紀半ばから15世紀初め頃の中央アジアの政治軍事情勢をみる。すなわち、1では、中央アジアの陸上交通路を破壊しモンゴル帝国を完全分裂させた1268年から1301年まで続いたハイドゥの乱（「ハイドゥ国家」）を、2では、ハイドゥの乱終結後におとずれたチャガタイ・ウルスの再統一と東チャガタイ・ハン国（「モグーリスタン・ハーン国」）の成立について述べる。そして、3で、東チャガタイ・ハン国の初代ハンで新疆でのイスラム教布教に貢献したトゥグルク・ティムールの事跡について、4で、その後のモグリスタン・ハン家の命運について述べる。

③ 前掲書『中央ユーラシア史』170頁。

④ R. C. フォルツ著（常塚聡訳）『シルクロードの宗教：古代から15世紀までの通商と文化交流』（原著は1999年刊）、教文館、2003年、167～168頁。

## 1 ハイドゥの乱

モンゴル帝国第4代皇帝モンケ・ハーンの没後（1259年8月）、1260年その帝位継承をめぐる争いが二人の弟フビライ（クビライ）とアリクブガ（アリク・ブケ）との兄弟間に起こると、雌伏10年のハイドゥはアリクブガに味方し、4年間続く帝位継承戦争のなかでイルティシユ川流域とアルタイ山脈南麓の草原地帯（現在の新疆北部）を中心とするオゴタイ＝ハン国（オゴデイ・ウルス）の故地を回復した。

他方、チャガタイの孫だが傍流にあったアルグ（Alghu「阿魯忽」）はアリクブガによって兵員・糧食の調達のためにトルキスタン（チャガタイ領）に派遣された。かれはイリ溪谷にいたると、オルガナ（アルクナ）より政権を奪って、自らチャガタイ家第5代当主（在位1261～66年）となり、フビライと手を結び、アリクブガに反抗したため、その追討を受け、ホータンやカシュガルを経てサマルカンド方面に退いた。ここでオルガナと結婚し、モンゴル皇帝ハーンの徴税官マスワード・ベクを抱き込み、軍を整え、ハイドゥの侵入を撃退したり、キプチャク・ハンのベルグと争って、オトラルやフワーリズム（ホラズム）を奪取したりした。アルグはフビライによってチャガタイ・ウルスの正主と認められた。

しかし、ハイドゥはアリクブガの降服（1264年7月）後もオゴタイ汗国の都エミル（「也迷里」、イリ川東北）で兵を養って入朝しようとしなかった。1266年にフビライがジョチ家の当主ベルケ、イランで自立した弟のフレグ、チャガタイ家の当主アルグを呼んであらためてクリルタイを開こうとしていた直前、三者はあいついで没した。チャガタイ・ウルスのアルグが没するとムバーラクシャー（在位1266年）がハン位を引き継いだ。フビライが自分の宮廷にいたムアトゥンの孫バラク（Baraq「八剌」、在位1266～71年）をチャガタイ家に無理矢理送り込んだ。が、かれはムバーラクシャーを退位させると、反旗をひる返し、フビライの代官を追い払って、チャガタイ・ウルスの実権を握った。しかし、バラクは新興のハイドゥに敗れ、マー・ワラー・アンナフルに退いた。

ハイドゥは1268年（至元5年）に諸王を誘ってモンゴル帝国の継承国家となったフビライの元朝に対して反乱を起こした。その翌年（1269年）春タラス河畔で開かれたクリルタイ（大集会）において、ハイドゥとバラクは和解してアンダ（盟友）となることを約し、バラクがマー・ワラー・アンナフル（現在のウズベキスタン共和国・タジキスタン共和国・トルクメニスタン共和国の領域）の3分の2を領有することが確認された。

同年夏、キプチャク・チャガタイ・オゴタイの3ハン家はタラスで会盟し、クリルタイにおいてハイドゥはその大汗（大ハーン）に推され、ハイドゥの宗主権が認められた。帝国の属領であったマー・ワラー・アンナフルを3ハン家で分割することを決めると、バラクは中央アジア各地の遊牧諸集団を糾合し、1270年イラン（イル汗国）の領有をもくろんでアム河を越えた。ホラーサーンのカラ・スー平原においてフレグ軍に粉砕されたバラクはマー・ワラー・アンナフルに逃げ戻るが、そこでハイドゥに殺害された。バラク没後のチャガタイ・ウルスは完全にハイドゥの支配下におかれた。

ハイドゥ討伐のためにチャガタイ・ウルスの本拠地イリ溪谷に進駐していたフビライ軍の陣中で、1276年、モンケの子シリギ、アリクブガの子ヨブクルとメリク・テムルらが反乱を起こした。反乱自体は鎮圧されたが、反乱軍がハイドゥ側につき、アルタイ方面に大きく広がるアリクブガ家の牧地と遊牧民が彼の陣営に加わった。チャガタイ家ではハイドゥの後見によってバラクの子ドゥア（ドゥワ）が当主となり、アルタイ地方からマー・ワラー・アンナフルにいたる領域に、ハイドゥ

を盟主とする「国家」＝ハイドゥ・ウルスが形作られた。

トルキスタン一帯に威令を及ばせたハイドゥは全力でもって元朝に攻勢をかけ、1287年にはチンギス（太祖）の末弟テムゲ・オッチギンの4代目の孫ナヤン（Nayan「乃顔」、「叛王」）をはじめとする東方諸王をして遼東で挙兵させ、東西から挟撃をはかった。ハイドゥ自身も軍を東へ進め、まずウイグルを破って、アルタイ山脈を越え、カラコルムに迫り、一時は元朝を圧倒する勢いを示した。同年5月、元朝の世祖フビライが遼河畔に親征して、激戦の末にナヤンを生け捕りにして死刑に処し、この地方を元朝の直轄地とした。続いて1289年にフビライ軍はカラコルムへ出兵し、ハイドゥ軍を退却させ、元朝の最大の危機を乗り切った。両軍の抗争は至元年間（1264～94年）を通じて、外蒙古西部で一進一退を続けていた。

元朝第2代成宗テムル（1294～1307年）即位後の1300年から01年にかけて、ハイドゥは和林（カラコルム）とパミル川との間（アルタイ一帯）で、海山（ハイシャン、のち第三代武宗〔1307～11年〕）の率いる元軍と激戦を闘ったが、そこで傷を負ったため帰途で病没する。ハイドゥの没後、それまでハイドゥに協力して対元朝戦に活躍していたチャガタイ・ウルス第10代当主ドゥアはハイドゥの後継者チャバル（チャバル「察八児」）にすすめて、1303年元帝テムル（成宗）に和議を申し入れさせ、成宗の宗主権を認めて、和を結ぶこととなった。ここにハイドゥの乱は終結するが、ハイドゥの乱は30年にわたり、多くの人材と国費を浪費させ、陸上交通路を破壊し、また元朝と各ハン国との結合を乱し、モンゴル帝国の分裂をもたらした。

## 2 東チャガタイ汗国の成立

### （1）チャガタイ・ウルスの再統一

1301年にハイドゥが没すると、彼を盟主とした諸ハン国の同盟はくずれ、まもなく諸ハン国間に抗争がふたたび起こった。そうした中で、つねにハイドゥを補佐してきたチャガタイ家のドゥア・ハンはハイドゥの葬儀をとりしきって中央アジアの第一人者であることを示し、ハイドゥが生前後継者に指名していたオロスではなく、暗愚なチャバルを敢えてオゴデイ家の当主に推挙して一門の分裂を策した。ドゥアは元軍と呼応してオゴデイ勢力を個別に撃破していき、チャバルを屈服させて、1306年にオゴタイ・ウルス（Ogodai Ulus）を消滅させた。ドゥアはイリヤカシュガルを回復し、チャガタイ・ウルスの再統一を遂げ、ここにドゥア＝ハン（「都哇汗」、在位1274～1306年）のチャガタイ＝ハン国（Chaghatai Khan）が成立した。チャガタイ家の所領は西はアフガニスタンからインド北部、東はビシュバリクを中心とする旧ウイグル国領に及んだ。

チャガタイ・ウルスの再統一なるも、1307年のドゥアの死去から1330年代までドゥアの諸子が相継いでアフガニスタン東境からインド方面に侵入を繰り返し、イル・ハン国と衝突した。ドゥア一門は「ハイドゥ・ウルス」の再興をめざし進軍してきたチャバルを撃退して、アフガニスタンに派遣されていたドゥアの子エセン・ブカ（ブハ）（Esen Bukha「也先不花」、在位1310～20年?）をチャガタイ・ハン位に推戴した。フレグ・ウルスとの対立は元朝軍によるエセン・ブハの本拠襲撃をまねいたりしたが、概してモンゴルの諸ウルス間の緊張が解かれ、遣使交換が盛んであった。

が、その間にチャガタイ・ウルスは東西分裂の傾向を見せ始めた。エセン・ブカの弟ケベクはその功を認められて、チャガタイ・ウルスの経済的中心地であるマー・ワラー・アンナフルとフェルガナの統治をゆだねられた。これ以降、緑豊かなカシュカ・ダリヤ河流域がケベクの根拠地となった。1320年ころ第14代ハンに即位したケベク（Kebek「怯別」、在位1320～26年）は元朝やフレ

グ・ウルスとの対立解消につとめ、21年からは連年元に使節団を送っている。かれ自身はイスラム教に改宗しなかったが、オアシス定住地帯の経済的重要性をよく理解し、イスラム教徒を保護し、無秩序な収奪を押さえ、ブハラやサマルカンドなどマー・ワラー・アンナフルの諸都市の復興につとめた。かれは兄エセン・ブカより統治をゆだねられていたカシュカ・ダリヤ河畔、サマルカンド南西のナフシェブ (Nakhsheb) 付近に宮殿 (カルシ) を営み、イスラム世界の貨幣制度に範をとって、ディーナールとディルハムの2種の銀貨を铸造し、1ディーナールを6ディルハムと定めた。「ケベキー」と呼ばれたこのケベク銀貨は、高品位で信頼性が高かったため、中央アジアの基準通貨として長く使用された。

1326年にケベクを継いで即位した弟の第17代タルマシリン・ハン (Tarmashirin 「荅児麻失里」、在位1326～34年) は兄と同じくカシュカ・ダリヤ河流域に住み、テュルク語を話していたという。かれは公然とイスラムに改宗し、「アラー・ウッ・ディーン」と名乗り、西トルキスタンばかりに滞在して、東方領を全くかえりみなかった。ために、チャガタイ・ウルスの本来の本拠地であるイリ方面・セミレチエ地方の遊牧モンゴル人貴族 (アミール) たちは彼の行為をチンギス・ハーンのジャサク (法令) に背くものとして、1334年別にタルマシリンの甥ブザンハンを擁立して叛乱を起こした。タルマシリン・ハンはアフガニスタンに逃げたが、捕らえて殺された。東部ウルスではその反動としてキリスト教を保護した。そのためアルマリクは一時キリスト教伝道の中心となった。

タルマシリン・ハンが即位した1326年から、オゴデイ家のアリー・スルターンに代わって再びハン位を取り戻したカザン・ハンが遊牧貴族に破れて死んだ1347年までの21年間に、6人のハンがめまぐるしく交代した。このような東西の争いによって、チャガタイ・ウルスはハン位の行方もたどれないほどに内部混乱を生じ、実権はトルコ化した遊牧貴族 (アミール) の手中に帰した。このような情勢の中で、東部ウルスでは、カシュガリアのドゥグラト Dughlat 家が実権を掌握した。

このように、マー・ワラー・アンナフルを中心にオアシスの豊かな経済力をより効果的に取り込んで政権を運営しようとする勢力と、セミレチエを中心としてモンゴル遊牧の伝統的な生活習慣やチンギスの法令によって遊牧政権を維持しようとする勢力との対立が深まっていった。チャガタイ系モンゴル貴族の分裂は決定的となり、14世紀中期にチャガタイハン国は東西に分裂した。

## (2) 東部ウルス：モグーリスターン・ハン国

チャガタイ・ハン国の東部ウルスでは、新疆の南部を押さえていたドゥグラト部 (「杜格拉特部」) のアミール、ボロジ (「播魯只」) がドゥア・ハンの孫で遠くエルチナ河流域にいたトゥグルク・ティムール (「禿黒魯帖木爾」) をまずアクスに迎えておいた後、元の順帝至正7年 (西暦1347年) にかれをチャガタイ汗国の王都であったアルマリクでチャガタイ汗 (在位1347—63) に擁立した。ここにチャガタイ後王による東部ウルスの統治体制が樹立された。これ以後、この東部ウルスは「東チャガタイ汗国」 (「東察合台汗国」) と呼ばれ、首都は当初アルマリクに置かれた (その遺跡は現在の霍城県の西北あたりにある)。

この国は別に「モグーリスターン＝ハーン国」 (Moghulistan 「蒙兀児斯坦汗国」) あるいは「モグーール・ウルス」 (Moghul Ulus 「蒙兀児・兀魯思」) とも呼ばれた。中国の歴史書『明史』では、アルマリクから遷都した都の名をとって、「ビシュバリク国」 (「別失八里国」) や「イリバリク国」 (「亦力巴里国」) と呼んでいる。統治者はチャガタイ家の後裔トゥグルク・ティムール支系である (「チャガタイ後王」と呼ばれる)。その領土は、東はハミで明朝と接し、西はバルカシュ (「巴爾喀什」) からフェルガーナ、北はエルチナ河 (「額爾齊納河」)、南はカラコルム山脈に及び、天山周辺から

カシュガルにかけて、いわゆる東トルキスタンを領土としていた。天山以南はウイグル人の居住区で、農業を主としており、天山北部では遊牧諸部族が遊牧を保持していた。

東チャガタイは、農耕定住派でイスラム都市文明を享受していた西チャガタイに対して伝統的な遊牧派であり続けた。マー・ワラー・アンナフル（西チャガタイ）のモンゴル遊牧民は、自分たちこそチャガタイ・ハン家の正統な継承者であるとして、「チャガタイ」と称し、東のイリ方面の同胞に対しては都市の定住民を略奪の対象としてしかみていないとして「ジェテ」（Jete、泥棒・匪賊）とけなし、東部ハン国を「ジャタ（辺境）・ウルス」（Jatah Ulus）と呼んでいた。他方、東部のモンゴル人はモンゴル遊牧民の伝統を引き継ぐものとしての自負から、みずからをモンゴルのペルシア語訛りである「モグール」Mogul と称するようになり、定住社会に同化した西部ハン家の人々を「カラウナス」（Qaraunas、混血児）とさげすんだ。

東部ハン家は15世紀後半に再び分裂するが、チャガタイ家の血統は16世紀末まで天山山脈一帯に存続した。1680年にジュンガルのタリム盆地征服により、モグール・ウルスのハーン家は消滅したが、その血統は17世紀末のカシュガル・ハン家につながり、その流れを汲む最後のトルファン・ハン家は18世紀中葉まで生存した。

### （3）西部ウルス：ティムール帝国

他方、チャガタイ・ハン国の西部ウルスは興起した封建諸侯に分割された。これらの封建諸侯はもとチャガタイ家歴代のモンゴル騎士団の領主であった。その呼び方も、モンゴル語の「ノヤン」からペルシア語の「アミール」<sup>⑤</sup>へと変化した。ハンの権力が早くに没落した西部ウルスでは、のちバルラス部（「巴魯刺思部」）のアミール・ティムール（「埃米爾・帖木爾（帖木兒）」）が立ち、1370年にチャガタイ後王の世襲統治権を廃止して、サマルカンドを中心とするティムール帝国を樹立した。ティムール（モンゴル語の「テムル」のペルシア語読み）は30年の在位期間に東と西に征服戦争をおこなって、西トルキスタンの旧チャガタイ・ハン国とイランの旧イル・ハン国領を完全に統合した帝国の君主になった。ティムールはチンギス・ハーンの男系子孫ではなかったため、ハンと称さず、チャガタイ・ハン家の王女を妃に迎えて、アミール・キュレゲン（婿のアミール）と称した。が、ティムールの軍隊組織は全くのモンゴル式で、モンゴル帝国時代以来の部族を中心に構成されていた。その政治や軍事制度は、モンゴルの大法令（ヤサ）に基づくとともに、イスラム教のシャリーア（イスラム法）をも採用した<sup>⑥</sup>。ティムール帝国の構成員はチャガタイ・トルコ人と呼ばれたが、彼らは間違いなく13世紀のモンゴル人の後裔であった。のちティムール朝の言語はチャガタイ語と呼ばれるようになった。それは今ではテュルク語に分類されている。

ティムール帝国の樹立前に、東チャガタイ汗国のトゥグルク・ティムールは1360年と1361年の2回、割拠状態にあった西部ウルスの都サマルカンドに出兵してこれを占領し、チャガタイハン国（チャガタイ・ウルス）を統一したことがあった。かれは息子のエリヤス・ホージャ（イリヤス・フワー

⑤ アミールは「指揮官、指導者、首長」を指すアラビア語。古典期には軍事的な指揮官や地方総督などの称号として使われた。「アミールのなかのアミール」という意味のアミール・アル＝ウマラー（大アミール）は最高軍司令官を意味し、カリフから軍事・行政権を全面的に委ねられた事実上の支配者に授与された称号である。現代では、湾岸などの首長国の首長や王国の王子がアミールの称号で呼ばれる。イスラーム主義運動の指導者の多くがアミールの称号を好む。アミールの複数形ウマラーは政治的実力者を意味し、イスラーム学者ウラマーと並んで、<従うべき権威者>とされる。『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年、

⑥ 宮脇淳子著『モンゴルの歴史：遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房、2002年、121頁。

ジャ Ilyas Khwaja 「也里牙思火者」を西部ウルスの総督に任命した。翌年（元の至正 23 年、1363 年）にトゥグルク・ティムールは亡くなったが、ハン位を継承したエリヤス・ホージャ（ハン位の継承を認めない説もある）は引き続きシル河（錫爾河、細渾河）右岸で「泥沼の戦い」を繰り広げていた。ある時（1365 年）、モグール軍は大勝を収めて、サマルカンドを包囲したが、軍内に疫病が流行したため、東に引き返さざるを得なかった。ところが、本拠の新疆南部では、モグリスタン・ハン家の家臣ドゥグラト部アミールのカマル・ウッディーン（Kamal al-Din 「怯馬魯丁」）がその機に乗じて、政変を起こし、エリヤスおよび宗嗣 18 人を殺害した。ただトゥグルクの幼子ヒジル・ホージャのみが運良く難を逃れた。東チャガタイ汗国では、トゥグルク・ティムールの死後、その相続争いが内乱に発展した。

西部ウルスのティムールはカマル・ウッディーン討伐を口実に、1371～90 年の間に東部ウルスに 5 回侵攻しこれを臣服させたが、この侵攻により首都アルマリクは廃墟と化した。十数年の内乱を経て、明洪武 16 年（1383 年）に、ヒジル・ホージャ（ヒジル・フワージャ Khizir Khwaja 「黒的児火者」、1361～1399 年）がドゥグラト部アミールによって第 3 代東チャガタイ汗（在位 1389～99 年）に擁立された。当時、アルマリクがティムールに蚕食されていたので、都を東側のビシュバリク（現在のジムサル「吉木薩爾」）に移した。それ故に、ハンは『明史』では「ビシュバリク王」と称され、国名も「ビシュバリク国」と呼ばれている。

が、これ以後モグーリスタン・ハーン家の権力は衰退し、多くの政権が各地に割拠し、新疆西部・南部のカシュガル、ウテン、アクスなどはドゥグラト部アミールが実質的に支配していた。これらの割拠した政権も依然として臣と称して可汗（ハン）に税金を納め、モグリスタン・ハン国に隷属する統治形態を維持していた。

1397 年、ヒジル・ホージャがティムールと講和すると、ティムールはサマルカンド東郊に新たな宮殿と庭園「よろこびの園」の建設を命じた。これは主家筋に当たるモグーリスタン・ハーン国の支配者ヒジル・ホージャ・ハンの娘を妻に迎えるための準備であった。ティムールは遊牧民の信奉を集めていた聖者アフマド・ヤサヴィー<sup>⑦</sup>の霊廟を大々的に修復し、シル河まで新たな妃を出迎え、11 月にイスラム法にのっとりシル河畔で挙式した。

中央アジアでスーフィズムが広まったのは、15 世紀にサマルカンドを中心に大帝국을築き上げたティムールの支持によるものであった。スーフィー教団は、16 世紀に新疆に伝教者・導師を送り込み、スーフィズムの浸透を図った。スーフィー教団の導師はイシャーンと呼ばれたが、当時新疆ではホージャと呼ばれ、支配者のハーンに強い影響力を及ぼすようになり、宗教的権威を持った

⑦ 11 世紀後半に中央アジア（現カザフスタン共和国）のサイラムに生まれたトルコ系遊牧民のスーフィー。ヤス（現カザフスタン共和国トルキスタン市）を本拠としたイスラム神秘主義教団（ヤサヴィー教団）を創設した名祖。ブハラで、シャーフィイー学派の法学者でスーフィーのユースフ・ハマダーニーに師事、後継者として修道場を任されたが、後に故郷のヤスに戻ってここで没した。アラビア語もペルシア語も解さない中央アジアおよびヴォルガ沿岸の遊牧トルコ人の間に多くの信徒を獲得した。アフマドとその後継者たち（アタの尊称をもつ）はその神秘思想をトルコ語の俗語を用いた単純な韻文形式の詩・歌謡の形で人びとの間に広めることにつとめた。その結果として、彼らによって神秘主義的トルコ民俗文学と呼ばれる一つの新しい文学ジャンルが確立された。その代表的な作品である《ディーワーネ・ヒクマト（英知集）》（15～16 世紀に集成された詩集）はアフマドの作とされる。ティムールによって霊廟にワクフが設定されたことによって経済的にも教団の中心となった。1994 年にトルコ共和国の援助でトルキスタン市に開設された大学は、彼の名を冠してアフマド・ヤサヴィー大学と名づけられた。前掲書『岩波イスラム辞典』1014 頁。『新イスラム事典』平凡社、2002 年、507 頁。



貴族として政治の実権をも握るようになる。ホージャの権威が増大した結果、ホージャはハーンに拮抗する存在となり、ついにはハーンの称号をも併せて、ハーン・ホージャと称されるものが出現するに至った。19世紀半ばまでこの地で大きな権力を持ったカシュガル・ホージャ家 Kashghar Khwajas の由来である<sup>⑧</sup>。こうして、イシャーン派と総称されるイスラム教が各教団各派に分かれながら新疆に定着した。その中で、ナクシュバンディー教団の白山派（カシュガルを中心とする）と黒山派（ヤルカンドを中心とする）が、清朝にスーフィー教団の政治的影響力を奪われて以後も、宗教面では主要な教派であった。

### 3 トウグルク・ティムールと「ホージャ時代」の到来

東チャガタイ汗国の時代は、イスラム教が新疆で大きな発展を迎え新疆に定着した時期であった。チャガタイ後王たちは支配地域内でイスラム教を強制したため、モグール人はイスラム教に改宗するとともに先住のウイグル人に融合していった（テュルク化）。と同時に、そうした中で、エシュディン（「額什丁」）家族を代表とするホージャ宗教貴族が新疆南部で興起するという、新疆イスラム教史上新しい特色も登場した時代であった。とはいえ、イスラム化を進めたチャガタイ汗国の下でも、仏教は勢力を維持し、東トルキスタンが完全にイスラム化したのは16世紀末であった。

#### （1）トウグルク・ティムールによる強制集団改宗

イスラム教が大きな発展を迎えた東チャガタイ汗国の中でも、とくに初代のトウグルク・ティムールは新疆でのイスラム教普及に功績のある統治者とされている。

トウグルクは即位する前、アクスで狩りをしている時に、シャイフ・ジャマルッディーン（「謝赫・哲馬魯丁」）と偶然遭遇した。トウグルクは彼から密かにイスラム教の教えを授けられると、イスラム教入信を希望したという。ジャマルッディーンの前祖は13世紀初め頃はプハラ（サマルカンド西方）のイスラム教スーフィズムの長老（シャイフ）で、ホージャ家族に属していた。彼の一族は最も早く中央アジアから新疆に入ってスーフィズムの布教活動を行ったホージャ家族となった。モンゴルのチンギス・ハーンがプハラを征服した後、新疆カラコルム Karakorum 山脈一帯に移住させられ、のちロプに定住した。ジャマルッディーンはロプ地方のチェタイ鎮のイスラム教長老であったが、鎮の町が砂嵐で埋まったので、アクスに移住して、弟子を集めて講義を行ないながら布教に従事していた。

トウグルク・ティムールが即位した後、ジャマルッディーンの子エシュディン・ホージャ（「額什丁」、アルシャドゥッディーン「阿兒沙都丁」ともいう）は首都アルマリクに赴いて説教をおこなった。ついに1354年、トウグルクは特別に大マウラーのヒジマツ（「黒馬特」）に彼の改宗儀式を主宰してもらい、イスラム教の信仰を正式に宣言したとされる。

こうして、トウグルクはチャガタイ家のハーンとして新疆で最初にイスラム教を信仰した王となった。エシュディン・ホージャはクチャにスーフィズム教団組織を設立し、道堂を置いて門徒を集め、

⑧ 一族の祖はアフマド・カーサーニー（1461/2 - 1542/3）で、「マフドゥーミ・アーザム」（偉大なる導師）と称されたほどの、ナクシュバンディー教団きっての理論家であった。サマルカンドから東トルキスタンへの進出は、第7子のホージャ・イスハーク・ワリーに始まり、長子の孫、及びその息子であるホージャ・アーファークがこれに続いた。前掲書『岩波イスラム辞典』259頁。

クチャ地区で布教活動に従事したが、トゥグルク・ティムールはこれに協力し、「可汗」（ハーン）の名において当地の住民をイスラム教に改宗させた。エシュディン一族はその後も、クチャ・アクス・トルファン一帯で大きな宗教的影響力を持ち続け、大量のワクフ・寺産を保有する、新疆南部で最大のムスリム世族となった。

トゥグルクはその後も配下の宗王・貴族に改宗を説き、臣民の農牧民には改宗を命じ、従わない者は処刑したという。一説によると、16万帳のモンゴル人が集団でイスラム教の信徒になったという。彼はその地位にいた期間にイマーム（宗教学者）<sup>⑨</sup>を各地に派遣して、イスラム教の布教に当たらせ、イスラム教の急激な発展に大きく貢献した。

## （2）スーフィズム（神秘主義）とホージャの登場

トゥグルクを改宗に導いたアルシャドウッディーンは、16世紀の史書によれば、モグールの戦士を一指も触れずに投げ飛ばすという奇跡を演じることによって、16万人を1日で改宗させたという。スーフィの起こした奇跡がモンゴル王族の改宗に大きな働きをした例は多くみられる。その奇跡譚を割り引いても、モンゴルが理解したイスラムにスーフィズムの要素が含まれていたことは間違いない。

また、ハーンの改宗と同時に、多数の者が集団で改宗たとされるのも特徴的である。こうした集団改宗の話は、10世紀にイスラムを受容した遊牧テュルクの改宗説話<sup>⑩</sup>にもみられるパターンであるが、イスラムへの改宗がハーンたちに大きな政治的利益をもたらしていたことを見落としてはならないであろう。それは、戦いや外交の場においても、統治の場においても、彼らにはムスリム君主という新たな正統性が付与されたからである。クーデターや反乱も神の意志であり、征服戦争も聖なる戦いとなった。

古来シャマニズム的環境下にあったテュルクは、天（テングリ *tengri*）を最高神とする考えが強かったが、カシュガル生まれのマフムードによる辞典『トルコ語集成』では、テングリはアッラー、すなわちイスラムの唯一神と訳されている。テングリ信仰が容易にイスラム信仰に変換されたことをうかがわせる。イスラム化した後でも神をテングリ（現代トルコ語ではタンリ）と呼びならわして現在に至っている状況をふまえて、羽田明は「民衆レベルでのテングリ、タンリは、セム的・アラブ的な厳密な意味での唯一神ではなく、シャマニズム的な最高神だったのではないか」と述べ、テュルク民衆のイスラム信仰における「シャマニズムの底流」を常に考慮すべきことを主張している<sup>⑪</sup>。そして、シャマニズム的精神風土にあったテュルクのイスラム受容に、スーフィーの活動、とくに

⑨ イマームは、コーランで「規範」「指導者」を意味し、その後は規模の大小を問わず、イスラム教徒の集団の指導者を意味するアラビア語である。現在は、①集団礼拝の指導者、②スンナ派ではカリフと同義語、③シーア派ではその最高の指導者、④スンナ派、シーア派を問わず、とくに学識の優れた学者の尊称、の4つの意味に用いられている。

⑩ 13世紀のアラブの歴史家イブン・アルアスィールは、962年に20万帳にのぼる多くのテュルクが改宗したと伝えている。堀川徹「中央アジアのテュルク遊牧民」『アジア遊学』No.30「特集・イスラムとの出会い」、勉誠出版、2001年8月、63頁。この集団改宗の説話については、拙稿「カラハン王朝と新疆へのイスラム教の流入 — 新疆イスラム教小史① —」（『文教大学国際学部紀要』第18巻第2号、2008年1月、59頁）でも触れた。

⑪ 羽田明著『中央アジア史研究』京都・臨川書店、1982年、432～434頁。前掲論文「中央アジアのテュルク遊牧民」『アジア遊学』No.30、64頁より重引。

その奇跡的行為や恩寵（バラカ *baraka*）<sup>⑫</sup>が大きくかかわったことは上に述べたとおりである。

“和卓（ホージャ *khwaja*）”はペルシア語からの音訳で、中央アジアで聖裔〔ムハンマドの末裔〕の身分を備えた宗教貴族を指している。中央アジアの聖裔には二種類あり、一つはサイド（サイド）と称するもので、もう一つはホージャと称するものである。身分の高貴さから言えば、サイドのほうがホージャよりもやや高い。しかし、新疆地区のホージャはカリフのアリーとムハンマドの娘であるファーティマの子孫であると自認しており、実際には「サイド」そのものであった。

ホージャは更に二種類に分類され、一つは血統証明書を持っていて“ホージャ・サイド・アータ”と称し、もう一つは証明書を持っておらず“ホージャ・ジュバリ”と称していた。16世紀の中央アジアのホージャは皆、後者の“ホージャ・ジュバリ”に属しているとされるが、彼らが真正正銘の聖裔であると認定するのは難しい。ナクシュバンディー教団の興隆の後には、聖裔ではないスーフイズムの導師たちもこの尊称で呼ばれることが普通になった。が、エシュディン一族の登場は新疆イスラム教史上において、いよいよ「ホージャ時代」が到来したことを示している。

## 4 ヒジル・ホージャとその後のモグリスタン・ハン家

### （1）ヒジル・ホージャの新疆東部仏教地区に対する「聖戦」

ヒジル・ホージャ（在位 1389-99年）が即位した頃、新疆では多くの政権が割拠し分裂していた。彼自身、明の洪武24年（西暦1391年）に初めて明の朝廷に使いを送って朝貢し、自らの政権基盤を固めようとした。明はモンゴルの元朝に取って代わった王朝であるので、本来はモンゴル民族の仇敵のはずであったが、ヒジルは自身の権威と政権維持のために明との友好関係を利用しようとした。が、他方では明朝の国境を脅かし、東部のカラホージャ（「哈刺火州」）やトルファン（「土魯番」）などの仏教地区に対して「聖戦」を起こして征服し、当地の仏教徒をイスラム教へ強制的に改宗させた。ここから、この両地域は、「ダル・イスラム」（「イスラム化された地区」の意、「達爾」）と呼ばれることになった。これより後、新疆の東部もイスラム文明が仏教文明に取って代わることになった。これは新疆イスラム教発展史において重大な事柄であった。ヒジル・ホージャはその後も引き続いて、1391年に明が占領していたハミ（コムル）等にも侵攻するが、明軍に撃退され、最後には矢に当たって亡くなった。

ヒジルの子のシャマー・イ・ジハーン（*Shama-i-Jihan*、在位 1399～1406）がヒジルの後を継いだが、その死後の権力争奪戦のなかで、ビシュバリク（「別失八里」）のムハンマド汗（*Muhammad*「馬哈麻」、在位 1408～1415年）はヒジル・ホージャの方針を継承して、モンゴル（モグール）人のなかで布教を押し進めた。こうして彼の統治期には全てのモグール人がイスラム教を信奉するようになった。

1418年、ヴァーイス・ハン（「烏韋斯（歪思）汗」、在位 1418～1421年、1424～1428年復位）はハンと称して、ビシュバリクから西のイリバリク（*Ilbaliq*「亦力把里」、現在のイーニン）に遷都するとともに、引き続き明朝との友好関係につとめた。ヴァーイス・ハンの死後、諸子の後継争いがまたもや起こり、まず次子のエセン・ブハ（*Esen Bukha*「也先不花」、在位 1434～62年）がハン位を奪ってビシュバリクにたち、天山東部のウイグルスタン地方を支配した。これに対して、

⑫ バラカはイスラム教で、本質的には神に由来する聖なる力、恵みの意味。バラカは血統を通じても継承され、聖なる家系（「聖裔」、シャリーフが典型的）を生み出し、政治的イデオロギーとして権威を正当化する根拠、聖と俗を空間的に分離する観念にもなった。前掲書『岩波イスラム辞典』783頁。

イリからタシケントにいたる本土を領有した長子のユヌス・ハン（Yunus Khan 「優努斯汗」）は部将をイリバリクにたて、1462年になってハン位（在位 1462～87年）を継承し、一時ウイグルistanを支配した。新疆イスラム教史上において重要なことは、ユヌス・ハンの時期にモグール人はイスラム教の部民と認められたことである。

他方、新疆南部（タリム盆地南縁）では、1480年、ドゥグラト部アミールのアバー・ベクル（Aba Bekr 「阿巴拜克」）がカシュガル（「哈密哈児」）で兵を起こして自立して「スルタン」（「素丹」）と称し、南疆6城（カシュガル、ヤルカンド、ウテン〔ホータン〕、アクス、エンギシャル、ウシュ「烏什」）を支配した。

## （2）モグリスタン・ハン国の東西分裂

1487年、ユヌス・ハンが没すると、その子ムマフムード（Mahmud）がユヌスのあとを襲ってタシケント（「達失幹」）に抛り、イリバリクで「長汗」（在位 1487～1508年）と称し、他方次子アフマド（Ahmad「艾哈邁德」、『明史』では「阿黒麻」）はチャリシ（「察力失」、現在の焉耆カラシャール）とトルファンで「幼汗」（在位 1487～1503年）と称し、ここにモグリスタン・ハン国は完全に東西に分裂した。

東方のアフマド「幼汗」は独立してウイグルistanのハンとなると、それまでウイグルistan・ハン家が明の西辺国境やハミに侵入していたのをやめ、明と和して通交した。このように、汗国はふたたび四分五裂状態となったが、大きくは新疆北部（モグリスタン）・新疆東部（ウイグルistan）・新疆南部（南疆）の3つに分かれていた。が、モグリスタン本土はオイラートやカザーフ人の進出によって圧迫され、しだいに天山以北の土地を保持できなくなり、タリム盆地にしりぞくことになった。

15世紀半ばに、チンギス家との婚姻をとおして権力の強化を図ったオイラト部のエセンが勢力を拡大させ、モグリスタンは彼に制圧された。さらに15世紀末、ウズベク族のシャイバーニー・ハン（「昔班尼」）が兵を率いて大挙南下し、1500年にチムール帝国を滅ぼし、続いてチャガタイ後王の連合軍をうち破った。アフマド「幼汗」は「アラシャ」Alasha（殺戮者）と呼ばれるほど残虐な君主であったが、1502/03年にシャイバーニーに破れて死んだ。ムマフムード「長汗」も1508年に死去し、その領土の大部分もカザフやワラ（「瓦剌」、オイラート）などの諸部に占領され、モグリスタン・ハン国はついに滅亡した。

新疆の南部は上で述べたように、ずっと東チャガタイ汗国に臣属しつつも、実質的には家臣のドゥクラト部〔ペルシア語 Duq(u)lat 「朶剌惕部」〕によって統治されていた。タリム盆地に退いたアフマドの長子マンスール（Mansur「満速児」、在位 1503～43年）はタリム盆地北縁のアクスやトルファンを保って、ウイグルistan・ハン家（のちのトルファン・ハン家）を継承し、その弟サイード（Said、在位 1514～33年）はドゥグラト部のアバー・ベクルを討って、カシュガルに抛り、明の正徳9年（西暦 1514年）に新しいハン家（カシュガル・ハン家）を立てた。これがヤルカンド汗国である。その建国を助けたのが『ラシードの歴史』の著者ハイダル・ミールザーである。ヤルカンド汗国では、イスラム教神秘主義の普及に伴って、ホージャ族の勢力が中央アジアから新疆南部に侵入してくると同時に、次第に現地のイスラム教の支配権を握った。

こうして、モグリスタン・ハン家は東トルキスタンのタリム盆地のオアシス農耕地帯に抛るウイグルistan・ハン家とカシュガル・ハン家の二つの勢力に変形し、天山のイリからタシケントにかけての地域を本土とするモグリスタン・ハン家は姿を消したが、チャガタイ・ハンの伝統は新しい

2つのハン家によって継承された。最後のイスマイル・ハンが1680年にオイラトのジュンガル部族のガルダン・ボショクト・ハンに捕らえられて殺害されるまで、東チャガタイ家は存続した。

モグール・ウルスにおいても、15世紀前半からはイスラム化が深化したが、ウズベクやカザフなどの新たな遊牧勢力の台頭により、モグールが草原地帯を失ってタリム盆地のオアシスに逼塞するようになると、この傾向は加速されたということが指摘できる。神秘主義教団、とくに「ホージャたちの道統」という別名をもつナクシュバンディー教団の進出は顕著で、ホージャ・アフラル(1404-90年)は1490年以前にサマルカンドから弟子をタリム盆地に派遣してその影響力を扶植することにも成功し、その孫のマフドゥーミ・ヌーラも1524/25年に自らカシュガルに来てモグリスタン・ハンの導師となった。

### おわりに——新疆におけるイスラム教の定着

チャガタイ・ウルスおよびモグリスタン・ハン国は、イスラム教を支配の手段として取り込み、政教一致体制を敷いてイスラム法を執行した。また、歴代のチャガタイ汗の君主はイスラム教を尊重し、大量の土地やその他の教産を「マザール」(聖廟)の宗教公産として賜った。同時にモスク(清真寺)も、ワクフ(「瓦克夫」として大量の地産を賦与された。他方では、イスラム教への改宗に反対する民衆を鎮圧し、仏教僧侶を追放したり仏教寺院を壊したり仏教経典を焼いたりして、仏教に激しい弾圧を加え、刑罰を用いて民衆にイスラム律法を守るよう迫った。

カラハン朝の君主やチャガタイ汗国の王は、シャイフ<sup>⑬</sup>(Shaykh「長老」の意、アラビア語の音訳「謝赫」)、マウラー<sup>⑭</sup>(Mawla「保護者」「主人」の意、アラビア語の音訳「毛拉」「滿拉」)、カーディ(法官の意、「カ迪」「喀孜)などの宗教上層人物を導師や宗教顧問として尊重し、宗教者に比較的高い社会的地位を享受させた。たとえば、アルシャドゥディー(「阿兒沙都丁)はトゥグルク・ティムールによって国師に取り立てられ、のちにその家族はクチャやアクス(阿克蘇)、ウシュ(烏什)、トルファン一帯などの「カーディ」(イスラム教法官)や長老(シャイフ、イスラム教団指導者)になる世襲特権を賦与された。その特権は、ビシュバリク(「別失八里)とイリバリク(「亦力巴里)の時代(つまり「モグリスタン・ハン国)まで続いた。

また、宗教上層部はカラハン朝以来のイスラム教布教の殉教者の墳墓を改修し、「マザール」(「麻扎)と称して信徒たちに「聖地」と崇めさせた。「トゥグルク・ティムール廟)や「モナエシディン・マザール)はその代表的なものである。

トゥグルク・ティムールは1362年に逝去すると、アルマリク城付近に葬られ、マザールが建設された。「トゥグルク・ティムール廟)はドーム型の屋根をもち、壁は鮮やかな瑠璃瓦で幾何学模様が描かれており、今日に至るも元代の建築を保ち、新疆に唯一残っている元代のイスラム教建築遺跡である。1981年、新疆ウイグル自治区の重点文物古跡保護単位に指定されている。

⑬ シャイフとは、声望のある年長者や教師、学者への尊称である。また各教派や学派およびスーフィズム教団の指導者を指すときにも使われる。イスラム教創始前、本来はアラブ部族内の首領を指す言葉であった。

⑭ マウラーとは、①イスラム国家、とりわけ中央アジアやインド・パキスタンで知識人や学者の尊称として使われ、通常はイスラム学者を指す。②シーア派では時々イマームをこう呼んで尊崇を示す。③ウイグル族などチュルク系ムスリムがモスクのアホンや教長をこう呼び、特別に徳の高く人望のある者を「大毛拉」と呼んだ。④甘粛・寧夏・青海・新疆など漢語を使用する回族・保安族・東郷族のムスリムが清真寺(モスク)で経典を学ぶ学生を「滿拉」(「毛拉」の異訳)と呼んだ。

エシュディンも14世紀末に死去すると、クチャに葬られ、そのマザールは今も現存している。現存している「モナエシュディン・マザール」（「黙拉納額什丁麻扎」）の建物は清朝後期アクバがクチャを占領している期間（1867～1871年）に再建されたもので、現在は礼拜堂、ミナレット、前庭を備える総合的宗教施設となっている。

このようにして、15～16世紀に、新疆でのイスラム教は長足の発展を遂げ、信者数と信仰地域が増加・拡大しただけでなく、新疆の各民族の主要な意識形態（イデオロギー）となったのである。

まず、住む地域によって異なっていたウイグル族にとって、イスラム教は16世紀にはウイグル族全体の統一的な宗教となり、その言語文字・風俗習慣・道德規範・心理素質等の面に深い影響を与えた。チャガタイ系モンゴル人（モグール人）はイスラム教を信仰するようになって以後、当地のウイグル人と通婚し融合するようになるとともに、次第に定住するようになった。モンゴル人のイスラム化とトルコ化は順調に進んだ。「モンゴル」を「モグール」と呼ぶようになったのも、モンゴル人のトルコ化の影響の顕著な事例である。

トルファン地区やハミ地区でもイスラム教は優勢を占めるようになり、15世紀末には新疆東端のハミ地区のイスラム化が完成した。これはアフマドとその子マンスール（「曼蘇爾」）がハミ地区の争奪を明朝と長期間争った結果であり、かれらはそのイスラム化に貢献したのである。

新疆北部のイリ河谷と中央アジア草原に居住するカザフ人遊牧社会でも、イスラム教が次第に中心的な地位を占めるようになった。カザフ人は漢代の烏孫・康居の子孫で、13世紀以降モンゴルと融合し、15世紀には自らの国家、カザフ汗国を建国した。オスマントルコ人のサイフィ（「賽非」）が1582年に書いた著作によれば、カザフ人たちはイスラム教ハナフィー法学派<sup>⑮</sup>の信奉者であったという。カザフ汗国トウコ汗の時期（1680～1718年）に制定された「七つの法典」によれば、イスラム教法は立法の根拠とされ、「アラー（真主）を侮蔑するものは7人の証明により事実と判明すれば死刑に処する」、「イスラム教を裏切りキリスト教に改宗するものはそのすべての財産を没収するものとする」などと規定されていた。カザフ人社会へのイスラム教の完璧なほどの浸透が理解できよう。

⑮ ハナフィー派はアブー・ハニーファの名によって名付けられたスンナ派イスラムの法学派。スンナ派の他の三法学派に比べ、地域的慣行や学者の個人的見解にいくらか寛大なことが特徴で商業と商人に理解を示す学派として知られた。